

単純化された非言語表現の心理臨床的側面からの分析

医療法人聖和錦秀会阪本病院 臨床心理室

三輪 幸二郎

1.緒言

言葉によるコミュニケーションが少ない人と、どのようにすればこころの交流ができるのか。これは精神科臨床で長く取り組んできた課題のひとつである。とくに精神科臨床の現場にいる次のような人々と交流をするときに課題となる。他人と会話することが少ない統合失調症を患う人。他人の気持ちを察するのが苦手な自閉症圏の人。認知症や知的障害など言語に関する能力に障害がある人。そういった人々のこころを把握して交流する試みが精神科臨床の実践で行われてきた。例えば絵画、音楽、ダンス、粘土など言葉以外の表現技法を用いたアプローチがある¹⁻⁶⁾。そのなかでも利用のしやすさから、描画が心理テストや心理療法として広く用いられてきた。描画は精神状態を表すだけでなく、言語表現をうながす⁴⁾側面もある。治療者と患者のコミュニケーションにも役立つ。

描画をコミュニケーションに利用するとき、絵に表現されたところをどのように理解すればいいのだろうか。精神科医の中井は描かれたアイテムの構成や色彩、絵のテーマなどから精神状態を把握した。そのとき治療者は観察者の視点から描画表現を分析する。しかし記号のような絵、または単純なパターンを繰り返す絵などに治療者が関心を持ち続けるのは難しい。そのとき治療者が関心をどう維持するかという課題が浮かびあがる。

深層心理学では治療者の在り方が治療過程に大きく影響を与えるとする。治療者は単に観察者として患者の前にはいるのではない。治療者は患者との心的過程をともに体験するという、相互に影響を与える関係性のなかにはいる。とくに言葉によるコミュニケーションが困難で、さらに変化が少ない患者は治療者の関心の在り方が治療上の課題になる。

そこで本研究では精神科病院に入院している慢性期の精神病患者の非言語による表現をどのように解釈するかについて考察した。なかでも今回は心理検査や心理療法において広く普及している樹木画を研究対象とした。

2.方法

まず描画の分析について基礎的な解釈の構造を考察した。今回はそのなかでもバウムテストや樹木画に関する解釈の構造について検討した。その検討結果をもとにして、ある事例

について患者の世界を治療者としてどのように理解するかを提示する。

3.結果

1) バウムテストの理解

バウムテストは Koch が発案した心理診断法である。被検者に一本の木を描かせることで、被検者の心理状態を豊かに浮かび上がらせる。バウムテストは被検者が描いた木から、被検者の心理状態を解釈する。そこで Koch がどのような側面から解釈したのかを列挙する。

- (1) Grünwald の空間象徴による理解
- (2) 筆相学に基づく理解
- (3) 発達研究に基づく理解
- (4) Jung の深層心理学的な側面からの象徴理解

細かい指標まで含めるとさらに多くの側面をあげることができるが、主要な4つの項目が基礎にある。

まず空間象徴による理解とは、木をどの大きさや位置に描いたかという画面構成の側面からの解釈である。これで過去志向、未来志向など心理状態の大まかな傾向を捉える。そして筆相学に基づく理解では、どのような線で描いているかという特徴から精神状態を把握する。速い筆致に切迫感が表れていたり、筆圧をかけた太い線から執着的な側面がみえたりする。次に発達研究に基づく年齢別の特徴と照らし合わせる。Koch は就学以前の幼児から小学生や成人まで年齢別にバウムテストを行い、描かれた木の特徴を統計的に分析した²⁾。例えば発達初期のバウムの特徴が小学校高学年に現れると、精神的な未熟さを疑うなどである。最後に木に表現しているところの状態を、象徴論的な理解から把握する。枝や幹、根、ほかに実や地面などの様子から精神的なエネルギーの在り方などをみていく。そして全体としてどのような人格であるのかをアセスメントする。

以上のように Koch のバウムテストは心理検査の側面が強い。バウムテストでは描画表現をもとにして、被検者の心理的な傾向をみる。Koch はバウムテストを非言語コミュニケーションとして役立てる点についてはあまり扱っていない。

2) 単純な線の理解

次に単純な描画表現について検討する。心理療法では治療者と患者が相互に影響する関係性の中で描画表現を用いる。そこで描画療法として単純な線を利用した児童精神分析家の Winnicott を挙げる。彼は子どもの心理療法において”なぐり描き”を用いた。子どもと治療者が相互になぐり描きをして、そこに何がみえるかという遊びを通して心理療法を行った⁶⁾。単純な線に内面を投影し、相互にやりとりをする。そのなかで治療者が絵の意味を理解しながら関わることで、治療作用を生む。

Winnicott のように、治療者が患者の描いた描画にどのように関与するかという治療者の在り方が治療過程に影響する。描画による治療は治療者の影響が大きい⁴⁾。

治療者が描画に関与する方法として精神科医の加藤の「木景療法」³⁾を検討する。木景療法とは患者に木の絵を描かせ、治療者がその木について治療の進展や継続に役立つように簡潔にコメントをするという方法である。この療法の背景には加藤の思想上の恩師である、禅哲学者の久松の影響があると筆者は考える。久松は禅芸術を研究していた。禅芸術には「一切の形に捉えられない」真の自己と、「一切の形を現ずる妙有」が現れる¹⁾。そして禅芸術を理解するためには、表現した当人だけでなく鑑賞者も禅の境地を体得しておかなければならないとした。心理療法に置きかえると描画にはこころの真の自己の姿が表れており、表現を理解するためには治療者は鑑賞者としてこころの真の自己についての深い理解が求められる。この自己とは例えば分析心理学者の Jung のいう元型的自己もそのひとつであろう。描画を通じて患者と治療者がこころの真の自己に気付くことが、心理療法において重要なのである。

3) A 氏のケース ※非公開とする（個人的な内容が含まれるため）

4. 考察

統合失調症を患う人たちのなかには、自己表現をあまりしない人たちがいる。表現をしても記号のような絵やパターン化した表現で描く。そのような人たちのこころを察知することは難しい。しかし言葉や行動に表れる変化は少ないが、絵などの媒介によって患者の精神状態や変化がみえる。患者たちは単純な描線で自分の在り方を表明している。そのような表現を治療者が敏感に察知しこころの状態を知る。このとき重要なのは治療者の理解力である。

バウムテストについて説明したように、精神状態を分析するためには解釈の枠組みがまず必要である。しかし表現が極端に簡素な場合、それだけでは十分ではない。治療者と患者の関係性と、治療者の理解力が治療に大きく影響を与える。治療者も患者の表現に触れたときにこころが動く。患者のこころを理解したときに、相互に影響を与え合う心理療法の基礎的な作用が働くのである。

今後は心理療法における些細な表現を利用するアプローチと、治療者と患者の相互作用についてさらなる実践と研究の発展が望まれる。

5. 結語

現代の精神科医療で求められるのは患者主体のアプローチである。治療者が主体となって「相手に与えるアプローチ」から、患者主体の「すでに患者が表現しているこころを理解し寄り添う」アプローチへの変化ともいえる。内面を話すことが少ない患者であっても、

たたずまいや醸し出す雰囲気、さりげないしぐさに患者のところが表れる。そういった微細な表現を察知する治療者の感受性が患者のところを支える。それは芸術療法にもあてはまる。重い精神障害を持つ患者の描いたたった一本の線にも、その人のところが表れる。単純な表現を通じて治療者は患者のところに触れるのである。

6.参考文献

- 1) 久松眞一 “禅美術の性格” 1956, 『久松眞一著作集 第5巻 禅と芸術』 理想社 1970
- 2) Karl Koch “Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage” Verlag Hans Huber, Bern, 1957, 岸本寛史 中島ナオミ 宮崎忠男 訳『バウムテスト 第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』 誠信書房 2010
- 3) 加藤清 丸井規博『木景療法』 創元社 2011
- 4) 中井久夫 “分裂病者の言語と絵画” ユリイカ 三巻 二号 青土社 1971, 『中井久夫著作集 精神医学の経験 1巻 分裂病』 岩崎学術出版社 1984
- 5) 中井久夫 “精神分裂病状態からの寛解過程 描画を併用せる精神療法をとおしてみた縦断的観察” 分裂病の精神病理 2」東大出版社 1974, 『中井久夫著作集 精神医学の経験 1巻 分裂病』 岩崎学術出版社 1984
- 6) Winnicott.D.W “The Squiggle Game” 1964, 『Psycho-analytic Explorations』 edited by Clare Winnicott, Ray Shepherd, and Madeleine Davis, The Winnicott Trust 1989.